

おじいさんの古時計

中村 龍介

四月の日曜日、妻の四度目の法事で娘たちがやってきた。三女の亭主と二人の孫も一緒だ。この日の段取りは、十二時から簡単に法要を済ませ、昼食の後、全員で多摩川堤に満開の桜を観に行くことにしていた。

外国に居る長女を除いて三人の姉妹が集まった。久し振りに顔をそろえた娘たちは部屋の片隅に陣取って、四方山話が始まる。

「お祖父ちゃん、もうやろうよ」

大人たちの話に退屈したナオくんが、私に向かって大声をあげる。ナオくんは三女の長男で今年中学に上がった。背丈も伸びて私も追い越されそうさ。

「まだ早いわよ」

話の輪から離れて、三女がこちらにやってきた。

「だって、もう十二時だよ」

ナオくんがリビングの壁にかかった時計を指差す。

「あれは二十分ほど進んでいるよ」と、私。

「まだ動いているんだ、古いなあ。ずっと前からあるよね」

三女がまぶしそうに時計を見上げた。

「そうだね。お父さんたちの新婚時代のものだからね。もう五十年近く経つなあ」

我が家の家具では最古参となった時計を私も見上げる。

「おじいさんの古時計だ。今、音楽で習っているんだよ」

父親と遊んでいたはずの弟のハルくんが突然割って入った。小学二年生になったばかりで、まだあどけなさが残る。

「あの歌に出てくるのは柱時計といって、もっと大きな時計でね、ゼンマイで動くんだよ」

「ゼンマイってなあに？」

「薄いカネの板をグルグル巻きにしたバネのことだよ。ネジを巻いて離すと、戻る力で時計が動くんだ」

「ゼンマイ、おいら知ってる。理科の実験でやったよ」

今度はナオくんが割り込んだ。

「おじいさんの古時計」と言われた壁掛け用の時計は、新婚当時、山口県の宇部市で手にいれたものだ。新婚家庭の家具一式を宇部で一番大きな家具屋に買いに行った。応接セット、たんす三点、和机、三面鏡に始まり、下駄箱、傘立てやカーテンまで必要なものすべてを買いそろえた。支払いを済ませて店を出ようとした時、奥から年配の紳士が出てきた。家具店の社長で、宇部の町では名士の一人だ。「君たち、新婚さんなの」と、話しかけてきた。「たくさん買ってくれた御礼に、時計をひとつプレゼントするよ。好きなものを選びなさい」

「どれでもいいのですか」

新妻が弾んだ声をあげて壁に架かった多くの時計の中から一点を選んだ。銅の文字盤をワインカラーの木枠で囲んだ、当時としては洒落たデザインだった。

あれから約半世紀が過ぎた。時計は各地を転々とした。海を渡り、駐在先のドイツやアメリカにまでもついてきて、一度も故障することなく正確な時を刻んだ。昨年の大地震で床に落ちてからは少し進みがちになったが、それでも十分に役目を果たしている。機能的にはむしろ私の方が少し怪しくなってきた。

我が家の生活の一部始終を見つめてきた時計。この先も、ずっと元気で活躍してもらいたい。少なくとも、私より先にダウンしてほしくない。

(了)

〔二〇一二年五月記 原稿用紙約四枚 課題「時計」〕

